HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期マルクスにおけるAssoziation概念の形成
Author(s)	田中, 秀樹
Citation	社会教育研究, 6, 85-99
Issue Date	1985-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28450
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P85-99.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

初期マルクスにおける Assoziation概念の形成

田　中　秀　樹

1　はじめに

マルクスにおいて，Assoziation 概念は，たとえば次のように使われている。

「この運動（協同組合運動－引用者）の大きな功績は，資本にたいする労働の隷属にもとづく，窮乏を生み出す現在の専制的制度を，自由で平等な生産者の連合社会 Assoziation ……とおきかえることが可能だということを，実地に証明する点にある。」（『個々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示』マル・エン全集⑯P.194，1866年，以下全集版の巻数とページ数のみ示す。しかし訳は必ずしも全集版のとおりではない。）

「……資本と労働との対立はこの協同組合工場のなかでは廃止されている。たとえ，はじめは，ただ，労働者たちが組合 Assoziation としては自分たち自身の資本家だという形…によってでしかないとはいえ。……資本主義的株式企業も，協同組合工場と同じに，資本主義的生産様式から結合 assoziiert 生産様式への過渡形態とみなしてよいのであって，ただ，一方では対立が消極的に，他方では積極的に廃止されているだけである。」（『資本論』㉕a P.P. 561～562）

ともにマルクスの協同組合に関わる論述としてよく引用される文章である。この引用文からも，Assoziation 概念は，マルクスの協同組合論を考察する上で不可欠な重要概念であること，そして同時に未来社会の内容を示す概念として用いられていることが読みとれる。しかしこの Assoziation 概念については従来顧みられることが少なかったといえよう。(1)

マルクスは，この Assoziation 概念を初期から後期に至るまで一貫して用いている（先ほどの引用は後期マルクスのものからである）。そして Assoziation 概念が著作の中で始めて用いられたのは，『パリ時代』（1843年10月～1845年２月）のマルクスにおいてであった。

ところで「アソシアシオン」（association）は，いうまでもなくマルクス独自の概念ではない。マルクスがパリに在住した当時，フランス社会主義者のほとんどが独自のアソシアシオン構想を掲げていた(2)と同時に実行に移しつつあった。「協同組織（アソシアシオン）は時代の＜メシア的公式＞であり，1840年代は協同組織構想（アソシアシオン）の百家争鳴時代であった(3)」のである。パリのマルクスが，フランス初期社会主義から何を学び，その批判の上にたってどのようなものとして自らの Assoziation を築いていったのか，その独自性が問われねばならない。(4)

小論は，初期マルクスの著作に即して（ここでは『共産党宣言』まで），マルクスの Assoziation

概念の形成とその内容を検討する。

以下，マルクスの著作の順序にそって展開しよう。

2　プロレタリアートの発見とAssoziation

—『パリ時代』のマルクスを中心に —

マルクスのAssoziation概念の形成にとって，人間が人間として連帯しあえるプロレタリアートの発見がひとつの画期をなす。「その普遍的苦悩のゆえに普遍的性格をもち……人間の完全な喪失であり，したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる」（①P. 427）プロレタリアートのみが人間として連帯しあえるからである。未来社会としてのAssoziation，いいかえれば「人間的な共同体」（㊵. P. 369）は，こうしたプロレタリアートの連帯の中で萌芽的に形成する。

ところでプロレタリアートの発見（『ヘーゲル法哲学批判序説』）以前のマルクスは，「人間的な共同体」をどのような論理で追求したのであろうか。

『ヘーゲル国法論の批判』におけるマルクスは，政治的国家と市民社会の分離の止揚，すなわち現実的市民の「純粋な，ずんべらぼうの個人性」（①P. 317）であるところの公民と「私人」としての市民への分離の止揚を，「民主制」に求める。「民主制」においては，「『人間』が体制の原理」（①P. 250）となり「体制は人間の自由な産物というそれ本来のあり方においてあらわれる。」（①P. 263）マルクスは，「民主制」によって「市民社会が現実的な政治的社会」（①P. 362）となった社会を，この段階では社会結合体 Sozietät とよんでいる。(5) 社会結合体 Sozietät においては「個人をして爾他の人々のためになさしめるとともにまた爾他の人々をして個人のためになさしめる」（①P. 361）のである。この社会結合体 Sozietät 概念は，後のAssoziationに近い内容を持つが，「民主制」による政治的疎外の克服の論理によって構成されていた点でAssoziation概念の内容とは異なってこよう。(6)

『ユダヤ人問題について』では，マルクスは，政治的解放に対する市民社会における現実的個別的人間の人間的解放という課題を提起する。「現実の個別的人間が…個別的人間のままでありながら……類的存在になったときはじめて……人間的解放は完成されたことになる」（①P. 407）。ところが市民社会の成員は「孤立して自己に閉じこもったモナド」であり，「彼らを結合する唯一の紐帯は，自然的必要，欲望と私利，所有と利己的一身との保全」（①P. 403）にすぎない。人間的な結合や連帯は，彼らのおかれている経済的諸関係から不可能であり，したがって「個別的人間のままで……類的存在」となることは不可能である。

この問題の解決をマルクスは，『ヘーゲル法哲学批判序説』におけるプロレタリアートの発見によって可能とする。

プロレタリアートは「普遍的性格をもち」「人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる」(7) 階級であるがゆえに唯一人間として連帯することができ，人間的解放をなしとげうる階級で

ある。したがってプロレタリアートの蜂起は，「人間的本質からの孤立に対する蜂起」であり，「非人間化された生活にたいする人間の抗議」として「どんなに部分的であっても，その中に普遍的精神をひそめて」（①P. 445）いる。

こうしたプロレタリアートが団結する様子を，『経・哲手稿』の中でマルクスは次のように描写している。

「共産主義的な手工業者たちが団結する vereinen とき，彼らにはまず第1に教説，宣伝，等々が目的と見なされる。だが同時に彼らはこの団結によって1つの新しい要求，仲間であること Geseil-schaft の要求を我がものとするのであって，手段であると見えるものが目的となっている。……仲間であること Gesellschaft，1つに結ばれていること Verein，楽しい談話（これもまた仲間であること Gesellshaft を目的としている）が，彼らにとって十分なのであり，人間が兄弟どうしであるということは彼らにあっては空文句ではなく真理であって労働によって堅くなった彼らのすがたから人間性の高貴さがわれわれにむかって光をはなつ。」（㊵P. 475）

プロレタリアートの団結による Gesellschaft や Verein が，当初は労働者としての共同的利害から出発し，しかし同時にその団結の中で人間的連帯として現われることが見事に示されている。ところでこうしたプロレタリアートの人間的結合こそが Assoziation にほかならない。[8] このことが『聖家族』の中で，Assoziation 概念をともなって始めて明示される。

「いまではイギリスやフランスの労働者は組合 Assoziation をつくっている。そのなかで労働者としての彼らの直接的要求だけでなく，人間としての彼らの要求もまた，たがいに高めあう素材となり，そのうえまた彼らはこの組合 Assoziation の中で，彼らの協力 zusammenwirken から生じる『莫大な』『はかりしれない』力について，非常に根本的な広範な自覚を示している。」（②P. 51）

以上のように「組合 Assoziation」概念は，プロレタリアートのそれとしては，すぐれて人間の人間としての結合様式を示す概念である。『ミル評註』の言葉をつかえば，私的所有にもとづく交通関係は「交換」として行なわれ，「交換をおこなっている人間の媒介的な運動は決して社会的運動でも人間的運動でもない」（㊵P. 365）のに対し，プロレタリアートの Assoziation の中での交通は「人間的関係」として現われる。

ところで人間と人間との社会的諸関係は，人間の生産の対象との関わりの結果である。[9] 人間が自らの生産物を排他的に占有する私的所有においては，「交換をおこなっている人間は人間としてたがいに関係しあっていないのだから，事物 Sache は人間的人格的所有という意味を失なっている。」（㊵P. 365）つまり私的所有のもとでは，私的所有者は生産物に対する排他的占有者として，私的目的の排他的支配として相互に関与するがゆえに，「真の所有」（㊵P. 381）から排除され，社会的諸関係の物象化が現われる。それに対して Assoziation においては「真実な人格的所有」が復活する。

「組合 Assoziation は……土地にたいする人間の情味あるつながりを立ちなおらせもする。というのは，土地は……自由な労働と自由な享楽とによって再び人間の或る真実な，人格的所有となるから

である。」（㊵P. P 427～428）

ここにおいては，「組合 Assoziation 」は所有概念として使われている。つまり Assoziation においては，人間の労働の対象に対する関係が人間的な関係として現われることによって，他の人間に対する関係も人間的連帯として現われる。結局 Assoziation 概念は交通関係概念であると同時に，その交通関係を規定する所有関係のあり方を含んだ概念として理解できるであろう。

以上のように『パリ時代』までのマルクスにおいて，すでに Assoziation 概念の基本的内容は提示されている。次に『ドイツ・イデオロギー』（以下『ド・イデ』と略）において Assoziation 概念がどのように展開されているのか，それをみていこう。

3　Assoziation概念の内容

―『ド・イデ』における Assoziation ―

(1)　一階級の他階級に対する「連合 Assoziation」

「連合 Assoziation 」という形式は，歴史的には，プロレタリアートの「連帯 Assoziation 」に先だって，一階級の他階級に対する団結として現われる。『ド・イデ』においては，こうした他階級に対する連合として，まずAssoziation 概念が使われている。たとえば「古代的な共同体所有および国家所有」に対応して次のような連合が現われる。

「それ（共同体所有）は，奴隷に対抗してこの自然生的な連合体 **Assoziation** の様式にとどまるよう緊縛されている能動的な公民の共同態的な私有財産所有である。」（③P. 18 ）

このように「古代的な共同体所有」においては奴隷に対する公民の「連合Assoziation」が現われる。次に「封建的ないし身分的所有」においてはどうであろうか。

「この（土地所有の）封建的編成は……生産者である被支配階級を向こうにまわしての１つの連合 **Assoziation** であった。ただし連合 **Assoziation** の形式および直接生産者に対する関係は古代の場合と違っていた。なぜなら違った生産条件がそこには存在していたからである。

土地所有のこの封建的編成に都市においては，同職組合的所有が対応した。……連合した **assoziiert** 略奪貴族に対抗する連合 **Assoziation** の必須性……逃亡した農奴たちによる競争の激化，全国土の封建的編成は同職組合 Zünfte を生じさせた。」（③P. 20 ）

「封建的所有」に対応しては以上のように２つの連合形態が現われる。土地所有の封建的編成は，農奴に対する貴族の連合として現われること，また同職組合所有は，略奪貴族と逃亡農奴に対する連合，すなわち同職組合として現われることが示されている。

以上のことから，「連合 Assoziation 」は一定の所有諸関係に対応したそのもとでの一階級成員としての諸個人の交通形態であること，[10] しかも階級成員の他階級に対する団結として「連合Assoziation」が現われることがわかった。つまり連合という形式は歴史的には階級成員としての団結として始めて現

われるのである。

このようにAssoziationは，歴史的には「一階級の他階級に対抗しての団結 **Vereinigung** 」として始めて現われるのであるが，それは諸個人が階級成員としてのみ，そして「平均的個人」としてのみ参加しているような共同態Gemeinschaftである（③P. 70 ）。

ところで諸個人の階級成員としての結合にもとづく共同態は，「諸個人に対して自立化」した「見掛け上の共同態」であり「インチキ共同態」（③P. 70 ）である。この共同態の中では，ただ支配階級のみが「階級の個人」であった限りにおいて人格的自由をもったのであり，「被支配階級にとってはたんに1つのまったく幻想的な共同態であったのみならず，また1つの新しい桎梏であった。」

これに対して，プロレタリアートの「連帯 Assoziation 」においては「本当の共同態 Gemeinschaft」が現われる。(11)

「本当の共同態において諸個人は彼らの連帯 **Assoziation** のなかで，またこの連帯 **Assoziation** をとおして同時に彼らの自由を手に入れる。」（③P. 70 ）

そして「本当の共同態」とは「革命的プロレタリアたちの共同態 **Gemeinschaft** 」（③P. 71 ）にほかならない。

(2) プロレタリアートの「連帯 Assoziation」

プロレタリアートの「連帯 Assoziation 」も，資本家への対抗，プロレタリアートの階級的団結として出発する。したがって一階級の他階級に対する連合として出発する。しかしプロレタリアートの連帯 Assoziation においては，プロレタリアートは階級成員，つまり「労働者」としてだけでなく，「人間」として人格的に交通する。プロレタリアートの階級的団結は，諸個人の個人としての連帯へと発展する。(12) なんとなれば，プロレタリアは「あらゆる現実的生活内容を奪われて抽象的個人となっているのであるが，しかしまさにそのためにこそ彼らは個人として結ばれ合うことができる立場におかれる」（③p.63）からである。

以上のようにプロレタリアートの連帯 Assoziation においては，以前の，一階級の他階級に対する連合 Assoziation に比べて，階級的個人ではなく人格的個人をその基礎におく。これがプロレタリアートの連帯 Assoziation の歴史的特質の第1である。

したがって第2に，プロレタリアートの連帯 Assoziation は交通形態としては，「個人としての個人」の交通形態として始めて現われる。「現代的普遍的交通は万人のもとへ隷属させられることによってしか諸個人のもとへ隷属させられることはできない」（③P. 64 ）のであるが，それはプロレタリアートの「普遍的な団結」によって可能となる。そして革命の結果，「従来の制約された交通の，個人としての個人の交通への転化」が全面的に現われるのである。

第3に，プロレタリアートの連帯 Assoziation は，同時に占有の様式である。生産力の全体からもぎはなされているプロレタリアートを占有の主体とする占有の対象は，「存在する生産力の全体」であり，占有の様式は「団結 **Vereinigung** と革命」（③P. 64 ）である。すなわち Assoziation にお

いて，プロレタリアートが諸個人として団結することによって，全面的な交通，全面的な生産諸力が「全面的に自己を発揮する諸個人によって我がものとされうる。」（③P. 475）つまり私的所有は廃止される。「団結した **vereinigt** 諸個人による全生産力の占有とともに私的所有は熄む。」

第4に連帯Assoziationを通じて，諸個人の発達が現われる。それは「偶然的個人」(③P.67）および「階級的個人」（③P. 72）の克服としての全面的個人の創出である。[13] ブルジョア社会のもとでは個々のプロレタリアは，自ら対象化した社会的諸関係から疎外され，自らの生活諸条件が偶然性として現われるがゆえに「偶然的個人」として現われる。すなわち「個人個人にたいする事物的諸関係の支配，偶然性による個性の押しつぶし」（③P. 475）が現われる。また自らの階級的諸条件のもとへ服属した諸個人として，「階級的個人」として現われ，「階級から，…彼らの人格的展開をあてがわれ」（③P. 50）る。しかしプロレタリアの場合，「人格的個人の階級的個人にたいする区別，個人にとっての生活諸条件の偶然性」はかつてなく明確であり，それゆえ「一個のプロレタリアの人としてのあり方と，彼におしつけられた生活条件である労働との矛盾が彼自身にはっきりしてくる。」（③P. 73）したがってプロレタリアたちは「人としての値うちを獲得するために」団結し，自らの階級的規定性を変革するなかで偶然性を克服する。その結果は，個性の偶然性からの解放であり，「労働の自己表出への転化」，「うちなる諸能力の全体の展開」（③P. 64）である。

以上，4点にわたってプロレタリアートの連帯 Assoziation の歴史的特質を明らかにしてきた。

このように『ド・イデ』の中では，Assoziationが一定の所有諸関係のもとでの，一階級の他階級への団結として歴史的に現われること，そしてプロレタリアートの連帯 Assoziation の場合において始めて，階級成員としてではなく諸個人としての人格的な交通が現われること，そして団結した諸個人による全生産力の占有によって私的所有が廃止される，といった展望が明らかにされた。

ところで『ド・イデ』の中では，プロレタリアートの連帯 Assoziation の歴史的特質は明らかにされたが，「連帯」としてきわめて一般的に把握され，連帯の発展過程，換言すればプロレタリアートの団結 Vereinigung と Assoziation の相互関連が，あまり区別されることなく使われていた。したがってプロレタリアートの団結の発展と具体的な団結諸形態，及び Assoziation との間の相互関連は，『ド・イデ』においては不明確であった。そこで次に団結概念と Assoziation 概念との関連を明らかにしよう。

4　団結の発展と Assoziation

―『哲学の貧困』『共産党宣言』から ―

(1)　競争と団結の発展

『哲学の貧困』においては，階級としてのプロレタリアートの2つの意味が明確に区別されている。第1に，客観的な経済的階級としての，換言すれば即自的階級としてのプロレタリアートである。第2

には，「自己を階級として構成」（④P. 147及びP. 189）した対自的階級としてのプロレタリアートである。プロレタリアートは「自己を階級として構成する」という過程を通してのみ，階級それ自体の廃止を可能とする。したがってプロレタリアートは，3つの発展段階を経過する。即自的階級としてのプロレタリアート ⟶ 対自的階級としてのプロレタリアート ⟶ 階級それ自体の廃止，の3段階がそれである。

ところで2つの労働者階級概念の間の区別を関係づけるものは，プロレタリアートの団結の発展である。『哲学の貧困』と『共産党宣言』においては，団結概念として Vereinigung および Koalition が，そして Assoziation 概念が駆使され，プロレタリアートが「自己を階級として構成」し，階級それ自体を廃止していく過程が展開されている。そこで「プロレタリアートの発展段階」における競争と団結，Assoziation の相互関連を次にみていこう。

まず『哲学の貧困』からみていこう。

「相互に結集する **assoziieren** ための労働者たちの最初の試みは，つねに，団結 **Koalitionen** という形でおこなわれる。[14]」（④P. 188）

ここにすでに団結と Assoziation の関係が示唆されている。すなわちプロレタリアートの Assoziationの最初の試みは，団結として出発するのである。

ところで団結の目的は二重である。ひとつには労働者間の競争を中止させ，そうすることによって，ふたつめとして資本家にたいする労働者全体の競争をなしとげうるようにする。このような団結の発展過程が，イギリスの例をとって次のように示される（④P. 188～189）。

群 Masse ⟶ 部分的団結 partielle Koalitionen（ストライキ）⟶ 恒久的団結 dauernde Koalitionen（労働組合 trade unions）⟶ 結合した資本に対する諸団結の集団化（ex.全国労働組合連合協会 National Association of United Trades）⟶ 政党（チャーチスト）

こうして団結の発展のなかで Assoziation が形成する。「そしてつねに結合している資本に対決するとき，彼らにとっては組合 **Assoziationen** の維持のほうが賃金の維持よりも必要不可欠になる。」この階級斗争の発展のなかでしだいに「組合 **association**（独語版は **Koalition**）は政治的性格を帯びるようになる。」

次に『共産党宣言』をみよう。

『宣言』においては，「プロレタリアートの発展段階の経過」は次のようである（④P. P. 483～484）

群 Masse ⟶（利害や生活状態の平均化）（階級衝突としての性格の強まり）⟶ 同盟 Koalitionen（1888年英語版では trade unions が挿入）⟶ 永続的な結社 Assoziationen

このプロレタリアートの発展過程は，「プロレタリアートが階級に，それとともにまた政党に組織されていく」過程である。すなわち団結の発展は，「競争による労働者の孤立化のかわりに，結社 **Assoziation** による労働者の革命的団結 **Vereinigung** をもたらす。」（④P. 487）ここでの「結社

Assoziation」とは，政党すなわち共産党にほかならない。

以上のように『哲学の貧困』『宣言』においては，団結による競争の停止，団結の発展の中でのAssoziationの形成が，プロレタリアートの階級としての成長の内実をなしている。そしてここでのAssoziationは，『哲学の貧困』においては，労働組合組織あるいは政党を，『宣言』においては，プロレタリアートの結社をさしていた。

(2) Koalition，Vereinigung，Assoziationの相互関連について

ところで問題は，ここで駆使されているKoalition，Vereinigung，Assoziationの相互関連がどう整理されるかである。この問題を整理することによって団結概念とAssoziation概念の異同が明確となる。

まず団結概念としてのKoalitionとVereinigungの関連についてみよう。結論から述べると，Vereinigungは，団結の発展過程，すなわち「ひとつになっていく過程」に重点がおかれている概念であるのに対し，Koalitionは，結果としての団結の存在を示す概念である。「…抵抗という一個同一の思想において，彼らを結集させる **vereinigen** — それが団結 **Koalition** である。」（④P. 188）すなわちvereinigenの結果として団結Koalitionという関係が存在する。このことは，団結を具体的な労働組合の発展との関連でとらえる『哲学の貧困』においては，Koalitionが，結社への労働者の団結の発展過程に注目する『宣言』においてはVereinigungが多用される，ということにも現われている。

こうした2つの一般的な団結概念に対し，具体的な団結の存在形態を示すものが，ストライキ，労働組合 trade unions，革命的団結としての結社，さらにはその他プロレタリアートの「階級としての組織」— そこには協同組合も含まれるであろう — である。

ところでKoalitionにしてもVereinigungにしても，団結概念は，すぐれて階級的団結として「資本家に対して」というレベルでの概念である。これに対して，Assoziationは，団結のあり様，換言すれば団結の内部での交通のあり様に視点をおいた概念である。団結概念が外部に対しての，対他的な概念であるとするならばAssoziationは，そうした団結内部での団結のあり方に視点をおく概念である。

Assoziation 概念は，具体的には『哲学の貧困』においては，労働組合組織および政党を，『宣言』においては，結社としての共産党をさしていた。しかし労働組合や政党に限らず，プロレタリアートの団結諸形態，換言すれば対自的階級としてのプロレタリアートの「階級としての組織」（④P. 189）も，その内部の交通関係に視点をおいて把握するとき，それはAssoziatin の形成としてとらえられるであろう。「階級としての組織」あるいは「階級としての革命的諸要素の組織」は，資本家階級に対する概念としてみれば，団結Koalition，Vereinigungであり，その団結内部の交通関係に視点をおけばAssoziationである。未来社会としての「1つの協同社会Assoziation」は，こうしたプロレタリアートの団結諸形態の中に萌芽的に形成されているのである。

そしてプロレタリアートは，団結と革命をつうじてみずから支配階級となり，階級対立の存立条件

を廃止することによって階級そのものを廃止する。

「労働者階級は，その発展の過程において，諸階級とその敵対関係を排除する1つの協同社会 **Assoziation**をもって，ふるい市民社会におき代える…。」（④P. 190 ）

その「協同社会 Assoziation」は，「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つの協同社会 **Assoziation**」である。ここにおいてはじめて「人間的な共同体」としての未来社会の内実がAssoziation概念をもって語られるに至る。

以上のように『哲学の貧困』と『共産党宣言』においては，プロレタリアートの階級的団結の発展にともなう Assoziation の形成が，そして革命を通じての未来社会の内実が Assoziation 概念によって説明されるのである。

5 まとめ

以上述べてきたことをまとめておこう。

『パリ時代』のマルクスにおいては，すでにプロレタリアートの「組合 Assoziation」の中に人間的な交通関係を，そしてそこに将来の「人間的共同体，すなわち個々人に対立する抽象的普遍的な力になることの決してない……社会組織」（『ミル評註』）の萌芽を見い出していた。そして「組合 Assoziation」が，同時に所有のあり方を含んだ概念であること，「組合 Assoziation」のもとで「真実な，人格的所有」が復活することが指摘されていた。このことは組合の中での私的所有の廃止を意味する。

『ド・イデ』においては，プロレタリアートの「連帯 Assoziation」の歴史的特質が明らかにされる。「連合 Assoziation」の形式は，プロレタリアートの連帯に先だって「一階級の他階級に対する団結」として現われるのであるが，それはあくまで階級的個人としてのすぐれて他階級に対する階級的団結であった。プロレタリアートの連帯 Assoziation も，資本家階級に対する団結として，すなわち階級的団結として出発するのであるが，そこでは始めて人格的個人としての結合が現われる。そして人格的結合にもとづくプロレタリアートの「普遍的団結」によって全生産力が占有されることによって全面的な交通が現われる。「団結した諸個人による全生産力の占有」はつまり私的所有の廃止である。

『哲学の貧困』と『共産党宣言』においては，プロレタリアートの発展過程における，階級的団結と Assoziation との相互関連が明らかにされる。結論のみ述べれば，プロレタリアートの団結諸形態，すなわち「階級としての組織」は，すぐれて資本家階級に対する団結なのであるが，団結内部の交通関係に視点を移すとき，それは Assoziation の形成として把握される。このことは(15)「古い社会の内部に新しい社会の諸要素がすでに生まれているという事実」（④P. 493 ）を示している。そしてプロレタリアートは，革命を通じて自ら支配階級となることの中でプロレタリアートであることをやめる。プロレタリアートは，その発展において，「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件で

あるような1つの協同社会 Assoziation」をもって古い市民社会におきかえるのである。ここにおいて始めて，以前「人間的な共同体」として把握されてきた未来社会が，「協同社会 Assoziation」として，Assoziation 概念をもって説明されるのである。

以上のように，Assoziation 概念は交通関係概念であり，団結という形での自立した諸個人の結合様式を示す概念である。そして諸個人の交通関係は，一定の所有諸関係と結びついている。それゆえAssoziation 概念は，所有のあり方，「占有の様式」でもある。そしてマルクスはプロレタリアートの Assoziationにおいて始めて，人格的個人の結合を，そしてそれゆえ「真実な人格的所有」の復活を見い出し，未来社会をAssoziation概念をもって説明した。

以上，初期マルクスにおいて，どのようなものとして Assoziation 概念が形成されたのかを明らかにした。この Assoziation 概念が，中期・後期のマルクスにおいて，どのように展開されるのか――後期においてもAssoziation概念が用いられていることは最初に述べた――，Assoziation 概念の中・後期マルクスによる展開を明らかにすることをもって今後の課題としたい。

（尚，初期マルクスの著作の中から Assoziation 概念にかかわる抜粋を資料として論文末尾に掲載した。）

註

(1) マルクス『ゴータ綱領批判』（望月清司訳，岩波文庫版）巻末の訳者解説，および同書P. 64の訳注(6)においてマルクスの Assoziation への注目がみられる。そのほか目にふれたものとして，布施鉄治『行為と社会変革の理論』青木，1972年，および平田清明『市民社会と社会主義』岩波，1969年，等がある。

(2) サン・シモン主義者の「普遍的協同（アソシアシオン）」論，P. J. ビュシェの「労働者生産協同組合（アソシアシオン・ウーヴリエ-ル）」，フーリエ主義者のファランジュを基礎とする協同社会論（アソシアシオン），初期プルードンの「漸進的組合（アソシアシオン・プログレシヴ）」等々がある。こうしたフランス初期社会主義のアソシアシオニズムについては，河野健二編『資料フランス初期社会主義』（平凡社，1979年）参照。それによれば，フランス初期社会主義の広義のアソシアシオンは，「おおむね，(1)労働者生産協同組合，(2)フーリエ派のファランステールに典型的な衣食住をともにする協同体，(3)全国的規模にわたる共有制（コミュノテ）に大別」されるという（P. 183）。

(3) 阪上孝『フランス社会主義』新評論，1981年，P. 94。

(4) とりわけ当時のフランス初期社会主義者のアソシアシオンが，その結合の要因を，利己主義の克服といった道徳性や宗教的倫理に求めたのに対し，唯一プルードンが現実の中に結合の原理を見い出そうとした点において，プルードンのアソシアシオン論との異同が重要となる。

プルードンのアソシアシオン論については，阪上前掲書，佐藤茂行『プルードン研究』木鐸社，1975年，等を参照のこと。

(5) 社会結合体 Sozietät という概念が登場するのは，『ヘーゲル国法論批判』で2ケ所（P. 361,

P. 362),『ヘーゲル法哲学批判序説』で1ヶ所(P. 419)である。

(6) 『ヘーゲル国法論批判』より前のマルクスにおいては，国家を「倫理的人間の自由な結合体Vereinigung 」(①P. 109)あるいは「たがいに教育しあう自由人の結合体 Verein」(①P. 110)として理解することに重点をおいた文章が見うけられるが，『ヘーゲル国法論批判』においては，国家をとり戻した利己的市民－公民の現実化－の結合体として，社会結合体 Sozietät 概念が登場する。その枠組は，民主主義による政治的疎外の克服の論理にもとづいており，この意味で社会結合体 Sozietät 概念は，政治的疎外論の枠組にもとづく概念であると考えられる。

(7) 「富だけでなく，人間の貧乏もまた同様に－社会主義を前提するなら－ある人間的意義，したがって社会的な意義をえるわけである。それは受動的な絆であって，これが人間に最大の富を，他の人間を必要として感じさせる。」(㊵P. 465)

(8) Gesellschaft と Assoziation の関連について。Gesellschaft 概念は，自立した諸個人の個体的交通にもとづく社会概念として把握される(望月清司『マルクス歴史理論の研究』岩波，1973年参照)。これに対して，Assoziation 概念は，自立した諸個人の結合様式の内実をよりすぐれて問題にする概念であると思われる。Gesellscaft とAssoziationは，人格的に自立した諸個人の交通を問題とする点で共通であるが，Assoziationは，よりすぐれて諸個人の交通の質を問題とする。つまりAssoziationにおいては，諸個人の交通が，人格的な結合関係として現われることが把握される。そしてプロレタリアートの団結にもとづくAssoziationにおいてこそ，人格的な交通関係が完成されるのである。

(9) 「人間は，疎外された労働によって，彼が生産の対象および行為にたいして疎遠な……関係を生みだすばかりでなく，彼はまた……他の人間たちにたいして立っている関係をも生みだすのである。」(㊵P. 440)

(10) 「現実の世界においては，諸個人の交通は彼らの生産様式に依存する。」(③P. 420) そして「彼らは……彼らの生産力と欲求の一定の発展段階における個人として交通を始め」(③P. 474)るのである。

(11) Gemeinshaft と Assoziation の関係について。Assoziation 概念は，人格的に独立した諸個人の団結という形での結合のあり様を示す交通関係概念であるのに対し，Gemeinschaft 概念は，共同的結合にもとづく社会概念である。Assoziationは個人の交通関係に力点がおかれているのに対し，Gemeinschaftは人間社会の共同的存在に力点をおいたひとつの社会概念であると考えられる。AssoziationとGemeinschaftとの関連はたとえば次のようになろう。

「諸個人がその最も個人的な現存在において同時に共同的存在 Gemeinwesen になっている」(㊵P. 456)とき，そうした諸個人の連帯 Assoziation にもとづく社会が「本当の共同態 Gemeinschaft」である。

(12) 「革命的プロレタリアの共同態の場合は……諸個人は個人として参加する。」(③P. 71)

(13) 石井伸男「歴史と個人」(『現代のための哲学[1]人間』青木書店，1981年）参照。

(14) マルクスは『哲学の貧困』をフランス語で執筆している。ここではフランス語版が手元にないので，原語との対照はドイツ語版および英語版を参照した。

(15) 『資本論』第1巻13章で，協同組合が「孤立的な変革要素」として位置づけられている(p.654)。

資　料

＜Assoziation 概念に関わる抜粋＞

—『経哲手稿』から『共産党宣言』まで—

※引用は「マルクス・エンゲルス全集」より行なうが，訳は必ずしも全集版のとおりではない。

「組合 Assoziation は土地に適用されると，大きな土地所有のもつ国民経済上の長所をともに分かち，〔土地所有の〕分割の本源的傾向，すなわち平等をはじめて実現する。同様に組合 Assoziation は，じっさいまたある理性的な……土地にたいする人間の情味あるつながりを立ちなおらせもする。というのは，土地は……自由な労働と自由な享楽とによって再び人間の或る真実な，人格的所有となるからである。」（『経・哲手稿』㊵P. P. 427～428）

「共産主義的な手工業者たちが団結する sich vereinen とき，彼らにはまず第1に教説，宣伝，等々が目的として見なされる。だが同時に彼らはこの団結によって，1つの新しい要求，仲間であること Gesellschaft の要求を我がものとするのであって，手段であると見えるものが目的となっている。こういう実践的運動をその最もすばらしい諸成果において観察するには，フランスの社会主義的な労働者たちが集会している vereinigen のを見ればよい。煙草をすい，酒を飲み，飯を食う等々は，もはや結合の手段 Mittel der Verbindung すなわち人々を結びつける手段 verbindende Mittel としてあるのではない。仲間であること Gesellschaft，1つに結ばれていること Verein，楽しい談話（これもまた仲間であること Gesellschaft を目的としている）が，彼らにとっては十分なのであり，人間が兄弟どうしであるということは，彼らにあっては空文句ではなく真理であって，労働によって堅くなった彼らのすがたから人間性の高貴さがわれわれにむかって光をはなつ。」（『経·哲手稿』P. 475）

「いまでは，イギリスやフランスの労働者は，組合 Assoziation をつくっている。そのなかで労働者としての彼らの直接的要求だけでなく，人間としての彼らの要求もまた，たがいに高めあう素材となり，そのうえ，また彼らは，この組合 Assoziation の中で，彼らの協力 zusammenwirken から生じる『莫大な』『はかりしれない』力について，非常に根本的な広範な自覚を示している。」（『聖家族』②P. 51）

「それ（共同体所有）は，奴隷に対抗して，この自然生的な連合体 Assoziation の様式にとどまるよう緊縛されている能動的な公民の共同態的な私有財産所有である。」（『ド・イデ』（③P. 18）

「この（土地所有の）封建的編成は，古代の共同体所有と同じく，生産者である被支配階級を向こうにまわしての1つの連合 Assoziation であった。ただし連合 Assoziation の形式および直接生産者に対する関係は，古代の場合とは違っていた。なぜなら違った生産条件がそこには存在していたからである。

土地所有のこの封建的編成に都市においては同職組合的所有 Korporative Eigentum が対応した。

……連合した assoziiert 略奪貴族に対抗する連合 Assoziation の必須性，……全国土の封建的編成は，同職組合 Zünfteを生じさせた。」（『ド・イデ』③P. 20 ）

「従来，諸個人がそこへ結合した vereinigen 見かけ上の共同態は，つねに諸個人に対して自立化したし，それは一階級の他階級に対しての結合 Vereinigung であった以上，被支配階級にとっては全くの幻想的共同態であったばかりか，新たな桎梏でもあった。本当の共同態 Gemeinschaft においては，諸個人は，彼らの連帯 Assoziation において，かつ連帯 Assoziation によって，同時に彼らの自由を手に入れる。」（『ド・イデ』③P. 70 ）

「近代の経済学者たち自身，たとえばシスモンディやシェールビュリエなどは諸個人の連合 Assoziation を諸資本の連合 Assoziation に対置する。」（『ド・イデ』③P. 62 ）

「団結した vereinigt 諸個人による全生産力の占有とともに私的所有はやむ。」（『ド・イデ』③P. 64 ）

「……これらの農民（大土地所有の破砕によって『小所有者たち』となった無産農民）には自分たちを共産主義的に組織することは可能ではなかった。なぜなら彼らには，共産主義的連合 Assoziation の第1の条件たる共同的経営を遂行するためのすべての手段が欠けていたからであり，また土地細分化は，むしろただそのような連合 Assoziation に対する要求をのちになってよびおこした諸条件の1つにすぎなかったからである。一般に共産主義的運動は，けっして田舎からではなくていつもただ都市からのみ出発しうる。」（『ド・イデ』③P. 377 ）

「かの結合しない nicht assoziiert 個人の生産を超過する結合した assoziiet 個人の生産の剰余について，プルードン氏は語る気なのであろうか。」（『哲学の貧困』④P. 117 ）

「事実，社会（société）とか共同的結合（association）とかいうことばは，すべての社会に，封建社会にも，競争に立脚する共同的結合 Assoziation であるところのブルジョア社会にも，与えることのできる名称である。」（『哲学の貧困』④P. 167 ）

「相互に結集する assoziieren ための労働者たちの最初の試みは，つねに団結 Koalition という形でおこなわれる。」（『哲学の貧困』④P. 188 ）

「たとえ最初の抵抗目的が賃金の維持にすぎなかったにしても，次に資本家の方が抑圧という思想で結集するにつれて，最初は孤立していた諸団結が集団を形成する。そしてつねに結合している資本に対決するとき，彼らにとっては組合 Assoziationen の維持の方が賃金の維持よりも必要不可欠となる。このことはまったく真実であって，イギリスの経済学者たちは，彼ら経済学者たちからみれば，賃金のために設立されているにすぎない組合 Assoziation のために，労働者たちがその賃金のかなりの部分を犠牲にするのをみて，唖然としているほどなのである。この斗争……においてこそ，きたるべき戦斗に必要なすべての要素が結合し発展する。ひとたびこの程度に達するやいなや組合（association）（独語版では Koalition ）は政治的性格を帯びるようになる。」（『哲学の貧困』④P. 188～189）

「労働者階級は，その発展の過程において，諸階級とその敵対関係を排除する1つの共同社会 As-

soziation をもって，古い市民社会におき代えるであろう。」（『哲学の貧困』④P190 ）

「……個々の労働者と個々のブルジョアの衝突は，ますます2つの階級の衝突という性格をおびてくる。労働者はブルジョアに対抗して同盟 Koalitionen （1888年英語版では trade unions を挿入）をつくりはじめる。……いつか反抗に立つための準備として，永続的な結社 Assoziation をさえつくる。

ときどき労働者は勝利するが，それは一時の勝利にすぎない。彼らの闘争のほんとうの成果は，その直接の成功にはなく，労働者の団結 Vereinigung がますますひろがっていくことにある。」（『共産党宣言』④P. 484 ）

「ブルジョアジーをその無意志，無抵抗の担い手とする工業の進歩は，競争による労働者の孤立化のかわりに，結社 Assoziation による労働者の革命的団結 Vereinigung をもたらす。」（『共産党宣言』④P. 487 ）

「……結合社会をつくった assoziiert 諸個人（1888年英語版では，a vast association of the whole nation）の手に全生産が集中されたとき，公的権力はその政治的政格を失う。」（『共産党宣言』④P. 495 ）

「階級と階級対立のうえに立つ旧ブルジョア社会に代わって，各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような1つの協同社会 eine Assoziation が現われる。」（『共産党宣言』④P. 496）